

気になる神社あれこれ

会員 井上秀男

(1)日本海の神、気比神社と気多神社

山陰沿岸や北陸沿岸には紀元前後から大陸や朝鮮半島の新羅から日本列島に流れて来た文化として渡来文化と漂着文化の両面性が有り、渡来文化は朝鮮半島から済州島・対馬・壱岐を経て北九州に意識的・計画的に運ばれた文化です。

また漂着文化は朝鮮半島から対馬海流に押し流されて、長門・石見・出雲地方など山陰から能登半島沿岸にかけて漂着してそれらの土地の基礎となり、それぞれの文化を発展させたものと思う。

山陰や北陸に漂着した文化圏は朝鮮半島の人達と交渉を保持しながら、砂鉄や食塩等を求め、住みよい土地へと、中国山脈を越えて瀬戸内海地域に居住し文化を築いた。今後は山陽の吉備地方から反対に文化を拡大していく。日本海沿岸の石川県羽咋市の気多(けた)大社と福井県敦賀市の気比(けひ)神宮が鎮座している。

気多神社の分布は但馬国気多郡、越前国加賀国江沼郡の気多御子神社、越中国射水郡気多神社、越前国頸城郡の居多(けた)神社等があつて、「気多」の神名、地名は日本海沿岸の中央部に特有の分布していることから、古代のある時期に神名、地名を共有していたことが感じられる。

羽咋郡の気多神社の縁起によると気多の神は多人数の従類を伴って大船で能登半島の北岸に着岸した、異国の王子であると伝えている。能登の一宮として、古代から重要な地位を保ち、祭神は大国主神で、本殿の後方には「入らずの森」として禁足

地となっている。

また気多神社の南東へ 1000m ぐらいのところにある寺家遺跡があつて、縄文時代前期から室町時代に亘る遺跡が存在する。気多大社(神社)は7世紀には存在していてこの地方の有力神として祭祀されて来た。



気多大社(神社)

気多神社には多くの神事が伝わっている。中でも平国祭(へいこくさい)鶺鴒祭(うさい)は有名である。12月10日頃七尾市鶺鴒浦町鹿渡島の断崖で、生け捕りされた鶺鴒は、鶺鴒取部、鹿渡島の年番の3人により鶺鴒籠(うかご)に背負われて二泊三日で気多神社にいたる途中、所縁の神社などに立ち寄る神事は中一日おいて行われ、闇の中で神職と鶺鴒取部の間で問答が行われたあと、鶺鴒が神前に向けて放たれて、神前に進んだ鶺鴒は神職によって忌柴(いみしば)で取り押さえられ、宮仕の手に渡されたあと、海岸で海に向かって放される神事として行われている。

それと蛇の目神事というのがあつて、オホナムチが国土平定にあたって、邑知瀉(おうちがた)の大蛇を退治した伝承に因む蛇の目の目的を弓矢で射って、槍で突き太刀で刺す行事である。気多の神の祭儀や伝承から出雲地方との結びつきを考えると、能登国を含んでいた越(こし)の国と出雲との関係で延喜式の能登の神社には、出雲神話の神々が祀られて、気多の神はオホナムチである。気多の地名は出雲風土記に出雲郡気多嶋と見え、東方に進めば

古事記でオホクニヌシが出てくる因幡国の気多ノ前（鳥取県気高郡）があり但馬国（兵庫県北部）に気多郡などがあって、越と出雲との間には古くから交流があり、それは日本海という海を通じての交流である。

(2) 気比神宮と吉備津彦神社の本宮

気比神宮は福井県敦賀市曙町に鎮座している。若狭湾の東の端敦賀湾の奥深く海辺の近くにある。



113 気比神宮 古代からの交通・文化の要衝である福井県敦賀市に鎮座する、敦賀は御前大津など「気比」地名である。本殿前の次郎の大鳥居は、正徳2年(1692)に再建されたもので、高さ11m、重さは余り、此像のトノの棟で造られたという。国指定重要文化財。 撮影 田村啓伸

敦賀は昔から畿内と北陸路を結ぶ交通の要所としての位置にあり、自然の良港に恵まれ、日本海航路の中心的場所として栄えて来た。日本書紀では崇神天皇の時に額に角のある人が船で笥飯浦（けひのうら）に着き、大加羅国（おおから）の王子で都怒我阿羅斯等（ツヌガアラシト）と名乗ったと伝えられている。

これらの伝説から朝鮮半島や大陸との海路が早くから開かれていたと思われ、6世紀末には高句麗使が越（こし）の海岸に着いた記録があります。また日本海を渡る航路は、8～10世紀の渤海使の道でもあった。敦賀地方は対外交渉の場として律令政府からも重要視されていた。

気比神宮の祭神は御食津（みけつ）大神で延喜式には気比神社七座とあり、中央の本宮に祀る仲哀天皇・神功皇后・御食津大神・日本武尊・応神天皇・玉妃命（たまのひめのみこと）竹内宿禰の計七神を祀り、越前国一ノ宮として気比神宮が祀られている。

気比というのは新羅系渡来集団である天日槍（アマノヒホコ）と関係があるとされ備前一宮の吉備津彦神社の本宮は気比比売大神を祭神としていて、敦賀の笥飯（気比）神社と関係があるとされる。吉備と天日槍の関係と吉備族とされる多くの人達が孝霊天皇との繋がりがあ。そして備中国一ノ宮吉備津神社・備前一宮吉備津彦神社は吉備の中山を神奈備山として、山頂に磐座を祀り本宮として、気比大神宮の祭神は気比比売大神（又の名前を気比大明神）でこの神は豊受比売とも称されたと、吉備津彦神社要略に見える。

(3) 備中の神社 足高山神社・福山の百射山神社と大和の三輪山

倉敷市笹沖に小高い足高山がありその山頂に足高神社が鎮座している。足高山はその昔は、奥津島山あるいはまたの名を小竹島と云われた島で、海（吉備の穴海）であった頃は潮流の激しい場所で、この付近を航行する船は安全を祈り、船の帆を下げた通り神に敬意を払い、そのため帆下げの宮とも称された。



足高神社の磐座

祭神は航海の神で大山津見命である。天日槍の神宝の中に足高玉があり、何等かな繋がりがあると考えられる。足高神社のある場所は大市郷（大内郷）にあたり大市首（おおいちのおびと）が居住していたと伝えられ、姓氏録には都怒我阿羅斯止（ツヌガアラシト）より出ると見え天日槍の子孫と称している。日槍族（ヒボコゾク）は但馬国の出石（いずし）に拠点を置いて播磨地方から吉備地方へと進出して来る。吉備族は天日槍系に関係した人物等が登場してくる

次に気になる神社として、備中国都窪郡三輪村字山根宮山に鎮座する百射山（モモイヤマ）神社がある。この神社の祭神も大山祇命（おおやまずみのみこと）となっている。神社の由緒は宝暦4年の備中集成誌に古老の伝承として触れている。また昭和36年の常磐村誌には「建武年中、南朝の忠臣新田義貞公の部将大井田氏経は百射山即ち福山城主に命じられた時に、式内百射山天神宮の破損を憂いて、宮殿を再建し武運長久の大祈願をした」と伝えられている。この福山城は建武三年に足利直義（ただよし）と大井田氏経の合戦の行われた俗に「福山合戦」である。その時に福山山頂にあった12ヶ寺と百射山神社は炎上し、その後福山城と峰続きの幸山（こうやま）の山麓に幸山城主の石川左兵衛久式（ひさのり）が百射山神社を再建したと伝えられる。近世には百射山大明神または百射山天神宮と称されていた。百射山神社は寛文12年（1672）に幸山山麓から都窪郡三輪村、現在の総社市三輪村字山根宮山に移され、この時岡山藩主池田光政から祭祀料と太刀一振の奉納があったと伝えられている。

この福山については、私は今から17年前に「福山と御崎神社」水原岩太郎著の資料を拝読したことがあり、福山の山頂にも

何度か歴史探訪として訪れている。その時に山手地区の郷土史家であった、守安納平氏に福山城山頂に案内して頂き、郷土の歴史について説明をしてもらった記憶があります。福山合戦の跡地として標高300mぐらいたが総社平野・高梁川・南の瀬戸内海の方角と大変見晴らしの良い場所である。頂上には南朝の忠臣として大井田氏経の表忠碑が建てある。この表忠碑を作った時に山頂にあった多数の石を使用して作られたとのことである。私も初めて頂上に登った時に大変に多い巨石がある場所だと感じた。その後「福山と御崎神社」の本を読んでみて福山が備中の神奈備山として祭られ、百射山神社の別名であったのではと福山を百射山とも称するのである。百（もも）とは諸（もろもろ）の意で、奈良県の三輪山を三諸山（みもろやま）御室山という。いずれも山頂に磐境が存在している。福山の山頂に多数の巨石がある理由と考えられる。神籬（ひもろぎ）の事を漢書には福と言うとあり、山頂に神籬が祭祀されていたのかもしれない。福山の麓の三輪村に菅生谷の地名があり福山の神籬の神なる明現宮と御崎宮を奉祀してある。

福山の山頂から東に降ると平坦な場所があり、大小の無数の石が散在している。これを里人は粟島壇と言われ粟島明神の小祠がある。粟島明神は少彦名命（すくなひこのみこと）であり、頂上の磐境を大己貴命の幸魂奇魂を祭祀すると考えると、奥津磐座でこの粟島壇は辺津（へつ）磐座であるとする、大和の三輪山の磐座と同じ配置になるといわれ、大和の三輪山はまた三室山（みむろやま）とも呼ばれ磐境が三基あると言う事で、こちらの福山にも三基の磐座を有するべきであるが、中津磐座については確認されていないとの事である。この福山の粟島壇については、八木敏雄氏

(故人)が現地に行って実測調査をされています。その時の資料をご本人から直接に戴いています。この福山という備中国の神奈備山として、大和の三輪山と類似した土地名等について今後もっと研究を要することで古代吉備国と大和の関係について色々な角度から箸墓の関係にと発展して行ったら大変楽しみに繋がって来る様に思っています。

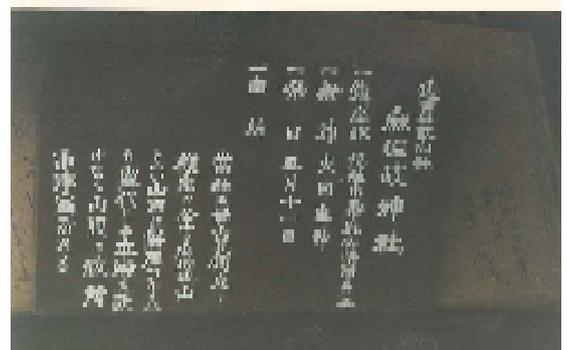
備前国一ノ宮の吉備津彦神社は吉備の中山を神奈備山として山頂に磐座を祀り、気比大明神を祭神としている。福山は備中の神奈備山として百射山神社が祀られて東側の少し降りたな所に栗島壇と呼ばれている場所があって栗島明神は少彦名命である。

奈良県桜井市の三輪山を神体とする大神神社(おおみわ)が吉備国の総社市に三輪の地名と、神奈備山と称される福山の百射山神社と三輪の大神の妻である倭迹迹百襲祖姫命(やまとととびももそひめのみこと)と百射(ももい)と百襲(ももそ)に何か関係があるのかと自分なりに考えています。箸墓古墳は卑弥呼の墓であるとの論文を発表されるなど色々な話題となっている古墳とされている。

備中の福山は御室(みむろ)山で、大和と同じ福山そのものを御神体とし、山頂にある磐境を宝殿として祭祀されていると考えられ、栗島壇には少彦名命を祭っている点から大和の三輪山と一致している点を感じられる。

都窪郡菅生(すごう)村大字生坂(いくさか)に鎮座している菅生(すがの)神社も少彦名命を祀っている。現在地は倉敷市祐安(すけやす)である。

総社地域には総社市秦(はた)の正木山山頂にある(標高381m)麻佐岐(マサキ)神社があり磐座があって、石の玉垣で囲まれている。



麻佐岐神社と磐座

正木山山頂へは久代(くしろ)の集落から北西の田広木(たひろぎ)を通して北東へ向かって登るルートがある。山頂からの見晴らしは大変に良い場所です。

今回は福井県敦賀市に鎮座する気比神宮、石川県羽咋(はぐい)市の気多神社と日本海側の神社から、岡山県内の式内社の神社について触れてみた次第です。神社の由緒や祭神について調べる中で色々な視点から解明するには、現地に自分の足を運んで学ぶことが必用であると思った。

参考文献

- 日本海と北国文化
- 福山と御崎神社(水原岩太郎著)
- 古代の日本海文化(歴史公論)